座談会 Ⅲ

Ⅰ 井戸端会議（3）

Ⅱ 働く成人者の意見発表

一　井戸端会議（3）

（一九六六・九）

家庭の日

出席者
秋山　セイ　　天田　君子
鯉淵スマ子　　鈴木　ナカ
高山　君子　　高崎　久子
司会と記録　　山崎　茂男

。わたしが小学三年生のときに戦争になって、それからずうっと戦争だったから、子どものときの思い出はつらいわね。

。二十三年ごろだったか、上野の展覧会にいったのよ。そしてお弁当を食べようとしたら二、三人子どもが寄ってきてね、お弁当さしてちょうだいっていうの。そのうちに、どんどん浮浪児みたいな子がきてね、こわくなって逃げだしたわ。

。それからみると、いまの子どもはしあわせよね。

。そういう時代に、子どもが四人なんていたら、母親は苦労だったわね。

。わたくしたちは思うように食べられなかったかわりに虫歯なんてあまりなかったでしょう。いまの子どもは、虫歯が多いわ。

。うちの子どもなんか十一本。

。はみがきをしつけていても、親が歯が悪いと、子どももそうなるもんじゃない。

司　しつけといえば、家の中ではあいさつなんかしますか。

しつけ

。家じゃあ、おはようはいわせているの。それとおやすみなさい。

。私は出かけるときには、必ず「いってまいります」っていうの。子どもも外から帰ってくると、「ただいま」っていうわ。

。私は親子であいさつなんて、とてもできなかったわ。そんなことしちめんどくさくって、ということだったでしょう。

。しつけでね、うちの子なんか本みたり、テレビみるのに寝ころがってばかりいるの、私なんかのときは、不作法だっておこられたわ。でも家じゃあ、旦那はいつもごろごろしているのよ。

だから子どもはそれまねしてるのね。仕ごとしてくる人は疲れてるのよ。
○女の子も、かしこまらないでしょ。人の前でも足ひろげて。
○片ひざ立てて。
○学校じゃ、そういうことといってくれないのかね。
○でもね、いつも家にいるのは母親だから、母親がきびしくなくては。
○小学校の先生がね、学校にあがった子をつかまえて、ハをみがけ、顔洗えはおかしいですよ。その前から、家でしつけるべきですよ。
○このごろの若い奥さんは、そういうことをしっかりしてるわ。
○しっかりしすぎて、うるおいがないんじゃない。だから教育ママなんていわれてるでしょ。

夫婦で話しあって

○うちでは中学生までは、私が責任。そのあとは、お父さんにたのみますっていうことにしています。
○子どもに注意してもね、夫婦で考え方がちがうことがあるでしょ。子どもが「どうしたらいいんだい。」なんていうことになるようじゃね。

家庭の日

○だからね、こんど家庭の日ができたことは、いいことだわ。
○家では家庭の日には、お父さんにもおそうじやってもらおうと思うの。いいチャンスだわ。
○わたしが留守にすれば、食べることぐらいお父さんと子どもでやるのよね。でもそうじはしないわ。
○家の近くの人でね。だんなさんが掃除もするし、ふとんなんかも自分であげてるのよ。
○でも家なんかじゃ商売柄、やってもらわなくてもいいから、お父さんは商売一生けんめいにっていうの。
○学校のそうじなんかだと、女の子のほうがさぼるらしいわね。
○きゃあきゃあさわいでいるんで、男の子がもんくをいうと、女の子はすぐめそめそして先生につげ口するっていうの。
○うっかりもんくいうと、女の子が帰りに待ちぶせしてて、男の子がいじめられるって。
○まあ、自分たちの教室ぐらいは、きちんとそうじさせるようにはしたいわね。

ぶつこと

。先生にぶたれた方がいいなんて男の人はいうでしょ。きびしくしてくれって。
。でもね、いざ家の子がぶたれれば、いい気はしないわね。あっちの子の方が悪いじゃないかなんてね。
。家の中でも、子どもをぶつ父親なんて少なくなったでしょ。
。両親で子どもをつかまえて、ごちゃごちゃいってもだめね。子どもがほっとするときないもの。家では、いつも母親にやられてるだろうから、せめて俺はだまってるっていうの。
。でも悪いことしたときは、きびしくしないとね。
。母親はいつもぐちぐちいっるからききめないんだわ。
。そう、でもね。こどものまえでお父さんがお母さんをこきおろしたりしたらね。
。母親も、子どもに父親を尊敬させるようにしむけないとね。
。夫婦げんかなんかすると、子どもが「やるなら子どものいないところでやれ」っていいます。
。家庭の日じたいは、かんげいよね。
。ふだん無関心の人にも、やってるっていうことで、だんだん関心をもたせられるでしょう。

愛情

。きのう新聞に出ていた。幼児をあずかって死なせたでしょ。
。それぞれ事情があって、あんな小さい子をあずけるだろうけど、私たちにはできないわね。
。満三歳までぐらいわ、母親の直接の愛情が必要だってね。
。あずかってる人の中には、子どもをサークルの中に入れて、泣こうがわめこうがだっこもしない。あやしもしない。それで子どももあきらめて静かになっちゃうっていうの。
。手をかけない養育だわね。
。少々、自分の経済生活が犠牲になっても、せめて小学校のうちぐらいみてやりたいわね。
。子どもとの愛情がなくなるわ。
。いつかみんなでユネスコ村へいったときね。きれいに花が咲いてるつつじを根こそぎとってしまった子がいるのよ。都内の坊ちゃん学校の子のようなの。
その近くに先生や父母もいて、おしゃべりしてんだけど、知らぬ顔なの。私たちが先生にいってやったけど。
。ふだん、勉強だ、規則だで発散させられないからじゃない。
。でもね、先生や父母がいてだものね。都会の人はこういう神経の人が多くなったようね。

。こういう話も女ばかりでやるのもいいけれど、男性も入ったらおもしろいね。いいようにやっつけてやるんだけどね（笑）

（終）

Ⅱ　働く成人者の意見発表

（一九六五・二）

志茂　柿沼八千代

もう昔々のお話になってしまったような気のする、昭和十九年戦争の中で私は生ぶ声を上げたという。もちろん私には戦争の記憶がない、何一つとして。ただ戦後の混乱期でしょうが長ぐつがなくて、紅のあしだに雨のつめたさを強く感じたこと。そして配給で買ってもらった長ぐつをはけたときの、水たまりをけってあるきたいようなあの喜び、その思い出がわずかに戦争の後を思い出させる。

それだけに食糧難の、その日々を幼い私をかかえて育てて下さった両親のご苦労が思われる。しわも多く、しらがも多くなって何か老人を思わせる両親に、私は深く頭を下げたい。両親より背の大きくなった今の私に、父母は一体何を望んでいるのだろうか。私をこれまで育てて下さった両親に、成人式の晴れ着を買うつもりでためた貯金の一部四万円をお礼の手紙と共に渡した。それが私の成人式を迎える両親への贈物であった。「気持だけでいいのよ」母は眼をしばたきながら云ったものである。しかし今の私に何が出来よう。七千三百日余りの、その日々のお礼をするのには、何をもっても出来ないのではないだろうか。これからの私の肩にその何かがかかっている。何か？　私はその一つとして会社での職場生活に、私の力を出したい気持でいっぱいである。

その職場を昨年労働省で行なった働く青少年の作文コンクールで、労働局長賞を受賞した私の作文で、ご紹介したいと思います。

〝空をみて思うこと〟

私は今空を見ています。

高い青い、私をすいとってしまいそうな空を、――中学を出、会社の組織の中の小さな歯車になってから五年目の私が今空をみているのです。入社当時のあの暗い淋しそうだった私が――一人の無言のボイスコイル巻線上から月日の流れと共に、私は今マイクロホン生産のチーフという、小さな肩書きを胸に抱きながら、その生活を涙の出るくらい満足しています。

冷たい朝の空気をすって六時五十分に出勤、七時半に会社につくと、作業の準備を、ベルト

コンベアー付きの作業台の上にします。半田ごて、ドライバー、テスター「おはよう」「おはよう」グループの仲間が職場に入ってきます。平均年令十八歳、七名のグループの人達が集まると、それを待っていたかのように、作業始めのチャイムが社内に流れます。〃さあいきますよ〃〃いいわよ〃次々にスマートなマイクロホンが、私達の手から指先から生まれます。「柿沼君、明日の十時までに四百本あがるかな」班長さんに云われ「はい」私は迷います。(出来そうもない、間に合わないとお客様に迷惑がかかってしまう)

そう考えると、私はひとり急につかれを感じます。(私の生産予定の組み方がいけないのかしら)強く思うと、それが知らぬ間に顔に出てしまうのです。すると「やっちゃんどうしたの元気がないわ」

「だって出来そうにもないでしょう」

「やれば出来るわよ、絶対出来る」

「ハッスル、ハッスル」と笑い声の中で私を力づけてくれます。また時には、グループの作業している真剣な姿に我に帰るときがあります。皆の無言のはげましが、私を勇気づけてくれるのです。いつでも気持良く協力してくれます。良い会社の中で、良いグループの人達に囲れ、私は本当に幸せ者です。〃良い人〃とひとくちにいっても、人間同志ですから意見の違い

も出てきます。でも私は、グループの一人一人の人間的良さを、いつも信じて上げなくてはいけないと思います。一時の自分の感情だけで、人を判断しては絶対にいけないと思います。三名のチーフの中で一番若い二十代になったばかりの私にとって、今の職務は重荷になることもあります。部品の調達、生産方法、検査、出庫と、いつも与えられたものを、自分の判断と責任によって選ばなければなりません。一つ気をゆるめ、仕様書通りの品物でなければ、お客様お得意様に、ごめいわくがかかります。正しい満足のいける品を送らなくてはなりません。

そして私生活の面でも、若い私達は悩んで壁につき当ってしまうことがままあります。そんな時グループの人達皆に相談します。皆一生懸命、自分のことのように考えます。私達は、まだまだ自分の道を発見し、他にはない独自の道を切り開かなければなりません。私達にとってこの職場は重要です。そして会社にとっても私達はなくてはならぬ一人一人であると思います。人手という古い考えから離れ、会社組織の中の一部となり信じてもらえれば、その信用に答える仕事をしなくてはいられません。一つの半田付けもとても大事に思います。

私は今まで、こんなに強く、働くことの厳しさと仲間のいる楽しさを思ったことはありません。私は思います。

私達はお互に勉強し話し合って

今仰ぎみるあの高い青い空にとどくよう
生きる限りのびていく様な生き生きした
生活をしていきたいと空に向かって思うのです。

以上が私の作文である。
そして第二に私は大人の眼で現在の社会をみたい。
○平和共存をとなえる反面、南ベトナム、コンゴのゆれうごく不安の顔
○不況にあえぐ一部中小企業者の顔
○米軍横田基地を持つ福生住民の顔
その中で私は、したいことがたくさんある。
自分にどれくらい力があるかためしてみたいし、当り前のことを、当り前のこととして、受けとる前に何かみつけ出したい。
私は、今までの大人が生きてきたよりもっとすばらしい私なりの生き方をしたい。
そして、自分が大人の世界に入っているにたりるだけの価値を発見したい。
今日、私達の成人を祝って下さった町の方々のお気持を忘れずに、この大人と認められた初

心（はじめの心）を忘れず、その大人の世界の中で子供の美しさを持ち真剣に生きたいと思う。
世界の破滅という悪夢は消えつつある。そして平和共存が原則になってきつつあり、低開発国の民族主義もしっかりと地についてきた。世界が平和であることの喜びをかみしめ、夢を大きく持ちながら、イッシュンイッシュンに、真剣でありたいと、成人式を迎えた私は思うのである。

（この年の成人式場での、柿沼さんの意見発表文をそのまま載せました。—編者）